

## 説明された御仕事

ミネアポリス ミネソタ州 アメリカ合衆国  
1950年7月11日



[www.messagehub.info](http://www.messagehub.info)

ウィリアム・マリオン・ブラハム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7

## はじめに

際立ったウィリアムブラナムのミニストリーは、マラキ4章4,5,6及びルカ書17:30と黙示録10:7と多くの聖書の預言に対する聖霊からの答えなのです。この世界規模のミニストリーはこの終わりの時に聖霊による神の御業の継続なのです。それは聖句の中にあり、イエスキリストの再臨のためにある人々を整えるために立ち上げるために必要とされていると書かれています。

あなたが祈り深くこのメッセージを読むとき、この印刷された御言葉があなたの心に刻まれるようにと祈ります。

メッセージの正しい転写、翻訳を提供できるように最善を尽くしておりますが、英語の録音がウィリアムブラナムによって語られた説教をもっともよく表しているものです。

オーディオや転写された1100の説教がウィリアムブラナムによって語られたものが無料でダウンロード可能で又多くの言語で印刷可能になっています。(日本語での翻訳あり)

変更が行わないかぎり、メッセージを無料でコピー、配布することは許可されています。

# 説明された御仕事

1 リンゼイ兄弟、ありがとうございます。

皆さん、こんばんは。

今夜、この国の美しいこの場所で、ヨーロッパから戻って最初の集会を始めることができるのは、本当に大きな特権です。

今夜は少し疲れています。かなり強行で移動してきました。ニューヨークから帰り、家に立ち寄って、すぐにこちらへ向かいました。

しかし、ここに来られたことを心から嬉しく思っています。そして、これまでの集会でお会いした友人たちと再びお会いできたことも喜びです。特にリッチー兄弟とホール兄弟。ホール兄弟とはニューメキシコ州カールスバッドで一緒に、心から愛するようになりました。また、リッチー兄弟とはヒューストンの集会で一緒にしました。

まるで家に帰ってきたような気持ちです。

そして、すでにここにあるこの素晴らしい交わりの霊を感じています。なんとも言えない温かさがあります。

預言者がかつてこう言いました。

「豊かな雨の音が聞こえる。」

これからのリバイバルの日々が、そのようなものとなることを私は信じています。

主が、豊かな霊の雨を降らせてくださいますように。

2 私はずっと、ミネアポリスに来る機会を持ちたいと願っていました。

ここ三、四年の間、何度も計画はしてはいたのですが、そのたびに別の場所へ行くことになり、どうしてもミネアポリスを通り過ぎなければなりませんでした。

それで、今回ここへ来られると分かったとき、本当に胸が高鳴りました。心から嬉しかったのです。

少し疲れていて、休暇から戻ったばかりでもありますから、集会が本来の

流れに乗るまで一晩か二晩かかるかもしれません。

ここにおられる多くの方々にとっても、私たちにとっても、まだ新しい場ですからね。

それに今回は急いで来なければならなかったものですから……。

通常、祈りの列を始める前には三日間、断食と祈りの時間を取るようになっています。ご存じの方も多いと思いますが、私はできるだけそのように備えようと努めています。

ここに、以前どこかの集会に来られたことのある方はどれくらいおられますか？

ちょっと手を挙げてみてください。

——ああ、それは素晴らしいですね。

3 今回は家に戻ってすぐにこちらへ向かうことになりましたので、その準備(断食と祈り)を取ることができませんでした。ですから、少しだけ本調子でないかもしれません。

最初の一晩か二晩は、少しゆっくり進めていきたいと思っています。どうか皆さん、忍耐をもって、そして祈りをもって支えてください。

私はこの集会で、必要を持つ方々に仕えるために、神の助けによってできる限りのことをいたします。できる限り多くの方のために祈りたいと思っています。

主はこれまで、病んでいる方々や必要の中にある方々のために祈る働きにおいて、本当に豊かに恵んでくださいました。今回も同じようにしてくださいと信じています。

4 ヨーロッパから戻って以来、これが最初の集会です。

ホール兄弟、声は少し小さすぎませんか？

もともと私はあまり大きな声で話すほうではありませんし、体も小さいものですからね。それにテントの中では、なおさら少し難しくなります。

実は、テントで癒しの集会を持つのはこれが二度目です。

55 ある晩、私が語っているときに、神が奇跡を行われるのを人々が見ました。そしてその場で受け入れたのです。

すると、担架も、車椅子も、何一つ残らず空になり、

人々は歩いて出て行きました。

イリノイ州ヴァンダリアでの大きな天幕集会のときのことです。(そのとおりです。)

さて、ここが大事なところですよ、皆さん。

それはこういうことです。

もしあなたがそれを受け取るなら、あなたはクリスチャンです。なぜなら、自分がクリスチャンだと信じているからです。

そしてそれで決着がついているのです。

なぜなら、主はあなたの告白の大祭司だからです。

よく聞いてください。

主は、あなたの告白の大祭司なのです。

あなたが「自分は何である」と告白するか、それがあなたなのです。

人は、自分が生きてると信じている以上に、高く生きることも、遠く生きることもできません。

例えば、いつも酒のことを話している人を見てください。

酒のことを話し、酒のことを考え、やがてそのカテゴリーへと落ち込み、酒飲みになります。

また、いつも卑しいことを考えている人。

卑しいものを見て、卑しいことを思い、卑しいものを読み……

あなたは自分が救われたと信じ、  
 救われたと告白し、  
 救われた者のように振る舞い、  
 救われた人々と交わります。  
 すると義が働き出します。そうでしょう？  
 やがて皆が、あなたが救われたことを知るようになります。  
 そのとおりではありませんか？

- 54 主は私たちの背きのために傷つけられ、  
 その打ち傷によって私たちは癒されたのです。  
 イエスは、ヘブル人への手紙3章1節によれば、  
 私たちの告白の大祭司です。  
 学者の皆さんはご存じでしょうが、「profession(職業)」という言葉は、ここでは「confession(告白)」と同じ意味で訳されています。  
 主は、私たちの告白の大祭司なのです。  
 さあ、ここをしっかりと受け取ってください。  
 そうすれば、ここに前に出て来る必要さえありません。あなたは座っているその場所で癒されます。  
 私は信じています。  
 今この瞬間、この建物の中で、人々がその場で癒されることは可能だと。  
 私はそれを見てきました。  
 この建物に車椅子が一台も残らなかったとき、  
 松葉杖も、盲人も、耳の聞こえない人も一人も残らなかったときがありました。  
 何千人も座っていた中でです。

- 最初のリバイバルは、回心して間もないころ、このようなテントで行いました。  
 私は、あのキャンパスが風に揺れる音を聞くのが好きなのです。  
 何か特別なものを感じます。  
 アブラハムがイサクやヤコブと共に天幕に住んでいたことを思い起こします。  
 彼らは御国の相続人でした。そして私たちは、その子孫なのです。  
 もし私たちがキリストにあって死んだ者であるなら、アブラハムの種を受け継ぎ、約束に従って相続人となるのです。  
 5 さて、この集会は主がお許しくださるなら、十二夜にわたって行われる予定だと聞いております。  
 一夜一夜を大切にし、実りあるものにしたいと願っています。  
 最初の一、二晩は、断食と祈りに入りながら進めていくことになりましたが……。  
 多くの方はご存じでしょうが、主イエス・キリストが私にお許しくださったこの奉仕は、謙遜に申し上げますが、少し変わっているかもしれません。  
 皆さんがこれまで見てこられた癒しのキャンペーンとは、やや異なる形かもしれません。  
 しかし、私は主が命じられるとおりにすることしかできません。  
 誰であっても同じです。主が言われるとおりに従うだけです。  
 この働きは、超自然的なお方の導きのもとにありますから、少し不思議に感じられるかもしれません。  
 皆さんが聞いておられるような現象が起こるのです。  
 それは病を語り出し、人生の罪についても語り、なぜ病んだのか、その原因まで示します。  
 そして、それを正すならば——これまで一度も失敗したことはありません。

人々は癒されてきました。

多くの場合、弱さが現れるとすれば、それは癒された後の信仰の不足です。

この壇上で、神の賜物の前に立つとき、それはあらゆるものを解き放ちます。どれほどひどく不自由であろうと、盲目であろうと、ねじれ曲がっていようと——この壇上で癒されます。

6 しかし、こうも何度も言われてきました。

「それはどれくらい続くのか?」と。

「数日もすれば、多くの人は元の状態に戻ってしまうのではないかと。」

そして、それを催眠術だとか、いろいろなことに結びつけて言う人もいます。けれども、私たちクリスチャンは、そのようなことについて無知ではありません。敵は常に、神に反対する何かを言うものです。それは当然のこととして受け止めています。

私たちは、迫害なしに人生を歩めるとは思っていません。

聖書はこう言っています。

「キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようとする者はみな、迫害を受ける。」

私はただ正直でありたいのです。

もし人が誠実で、真実であるなら、神はその人と共にいてくださいます。

人は自由意志を与えられていますから、何を言うこともできます。しかし、もし私が何かを語って、それが真実でないなら、神はそれを証しなさいません。けれども、私が神について語り、神がなさったことを語り、そして神ご自身がそれが正しいと証しされるなら——それは人ではなく、神が語られたのですから、あなたはそれを信じるべきです。

それがどの聴衆に対しても公平な態度です。

そして、これまでなされてきた主張は、まさにそのことなのです。

7 これは、私自身に何か特別な力があるということではありません。

それを隠しておくことはできません。

升の下に隠しておけば、すぐに失ってしまいます。

あなたはそれを告白し、喜びをもって皆に伝えなければなりません。

さて、もし外に出て、誰かがこう言ったらどうしますか。

「そんなものはない。ただ祭壇で感情的になっただけだ。」

53 ここにいるクリスチャンの方はどれくらいいますか?手を挙げてください。

おお、すばらしい。ほとんど百パーセントでしょう。

皆さん一人一人が、同じ方法で救われました。

信仰によってです。

ここに来て、一週間泣いて祈り続け、次の週も、さらに一か月泣いて祈ったとしても、

信仰によって主を受け入れない限り、あなたは依然として罪人のままです。

そのとおりでしょう?

あなたを救うのは涙ではありません。

あなたを救うのは信仰です。

では、受け入れたとき、あなたはそれを信じます。

すると誰かがこう言うかもしれません。

「本当に?何か変わったように見えないじゃないか。目はまだ茶色だし、何も変わっていない。」

あなたは救われたことを“見せる”ことはできません。

あなたは、見えないものを証ししているのです。

あなたの信仰が、「私は救われている」と言うのです。

それからどうしますか?

しかし、壇上で盲人の目を開き、聖書を読めるようにする力があるなら、その人は信じ続ける限り、いつでも読むことができます。

それは信仰なのです。

信仰を失ったとき——

不信仰な人々の中に入り、「そんなものは嘘だ」と言われ、サタンがあなたにささやき始めるとき、あなたは最初にいた状態へと戻ってしまうのです。

それは……あなたが——

52 ある人がこう言います。

「神の癒しはどうなのですか……それはいつも続くのですか？」

それは、信仰が続く限り続きます。

救いも同じです。信仰が続く限り続きます。

自分はもう救われていないと感じるなら、そのときは救われていないのです。

なぜなら、あなたがたは恵みにより、信仰によって救われるのです。そうでしょう？

祭壇に来るとき、あなたは何をしますか？

自分の罪を告白し、神に赦しを求めます。

そして——ここをよく聞いてください。

あなたの心の中で、神があなたを赦して下さったと信じなければなりません。

そうでしょう？

信じなければならぬのです。

それから壇を離れて歩き出します。

そしてまず最初に、自分は救われたと告白しなければなりません。

私はただ、皆さんと同じ一人の人間です。恵みによって救われた罪人にすぎません。

私はとても貧しい家庭に生まれ、信仰とは無縁の環境で育ちました。

祖父母はカトリックで、父も母もそうでしたが、教会にはまったく通っていませんでした。私たちはアイルランド系の家系です。しかし、信仰生活というものはありませんでした。

けれども、私がまだ幼いころ——七歳くらいのとき、いや、実は生まれた朝にさえ、非常に不思議な出来事がありました。私が生まれたその朝、部屋の中に一つの光が入って来たのです。家族は皆、驚いて泣き出しました。ケンタッキーの山あい、私が生まれたその場所でのことです。

そして七年が過ぎ、七歳になったとき、その光は初めて私に声として現れました。

それは私にこう告げました——

「決してたばこを吸ってはならない。酒を飲んではならない。自分を汚してはならない。

なぜなら、あなたが大人になったときに、なすべき働きがあるからだ。」

その時から、私はその言葉を胸に刻んできたのです。

8 その後も、その御声は人生の中で繰り返し現れました。

さまざまなことを示し、私は告げられたとおりに語りました。そして、それが成就しなかったことは一度もありません。

1946年、いや正確には1947年の5月7日、部屋の中に主の御使いが現れました。

その御方を見たとき……初めて人の姿でお見かけしたのです。それまでも何度も現れていましたが、人間の形として見たのはそのときが初めてでした。御声を聞いたときは、まだどなたなのか分かりませんでした。

最初のリバイバルの後、川辺でも現れました。

遠くにある星のような姿で降りて来ましたが、近づくにつれて光のように見えました。

そのときは、おそらく一万人ほどがそこにいたでしょう。多くの人がある場で気を失うほどでした。

しかし私は、その意味が何であるのか、そのときはまだ分かりませんでした。

9 やがて主が私にお会いになったとき、こう告げられました——

「病人のために祈りに行きなさい」と。

私は申し上げました。

「人々は私を信じないでしょう」と。

すると主は言われました。

「モーセに与えられたように、あなたにも徴(しるし)が与えられる。モーセは二つのしるしを与えられ、それによって神が彼を遣わし、民を解放するためであることを証明した。同じように、あなたにも二つのしるしを与えられる。一つはすぐに現れ、もう一つは、あなたが誠実であるなら、後に続いて現れる。」

今夜ここにおられる多くの方は、それがどのように実現したかをご存じでしょう。

最初のしるしは、病の識別でした。どのような病であるかを示されることです。それはやがて完全な形となり、一度も失敗することはありませんでした。

そして次に始まったのは、人々の心の秘密、人生の中でしてきたこと、歩んできた道のりまでも語られることでした。

今それを聞いて、戸惑う方もおられるかもしれません。誤解されることもあるでしょう。

10 しかし、ナタナエルがイエスのもとに来たときのことを思い出してください。

兄弟のピリポが彼を見つけて来て、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったあのナタナエルです。

そして彼がイエスのもとに来たとき——祈りの列の中で——イエスは彼にこう言われました。

「見よ、まことのイスラエル人だ。そのうちに偽りが無い。」

賜物と召しは、信仰を奮い立たせるのです。

癒すのは信仰なのです。

50 さて、壇上に来る人が、もし信仰を持っていなければ、すぐに「あなたには信仰がない」と告げられます。

今、たとえ話で説明しましょう。

ここにジョーンズさんが来ます。こうして歩いて来て、

「こんばんは、兄弟」と言います。

「信仰がありますか、ジョーンズ兄弟？」

「はい、信仰があります。」と言いますが、彼の信仰はここ(低い位置)にあるとします。

一方で、ここには……私の言い方で言えば、「振動」が上の方にあるとします。

しかしジョーンズ兄弟は、まだ下のところにいるのです。

彼は「信仰がある」と言いますが、その状態のままでは、ここでは癒されません。

けれども、時間がたてば癒されるでしょう。

なぜなら、たとえほんの小さな点ほどの信仰であっても、それをしっかり握り続けるなら、やがてあなたをそこから引き上げるからです。

51 しかし、壇上であなたが期待しているような、瞬間的な癒しについて言っているのです。

壇上で「すべてが癒された」と宣言するときには、何百人もの批評家が座って見えています。新聞記者もいます。あらゆる人が、それを批判しようと待ち構えているのです。

ですから……

彼らがここを離れ、この賜物の影響圏から出た後のことについては、私は責任を負いません。

いのちの木と死の木は、私たち全員の前にあります。

どちらを取るかは、あなた自身が選ぶのです。

どの木から食べるかによって、あなたが何者であるかが決まります。

そのとおりです。

神はあなたを自由意志のある存在として創造されました。

あなたがどうするかは、あなたに任されています。

神はあなたに無理やりご自分を愛させることはなさいません。

愛を強制されることはありません。

49 もし私が妻に無理やり私を愛させたとしたら、私は彼女と結婚するのが怖くなるでしょう。

しかし彼女は、私をそのまま受け入れ、自らの意志で結婚してくれました。

そのとおりです。

彼女は私を愛し、そのまま受け入れてくれました。

私たちも神のもとへ、そのように来なければなりません。

神は、私たちがご自分を愛し、来て、そして御言葉を信じることを望んでおられます。

そして神の御言葉は、神の癒しを教えてください。

それを信じる方はどれくらいいますか？手を挙げてみてください。

すばらしい。

御言葉がそう教えている。それで決まりです。

賜物と召しを信じる方はどれくらいいますか？

いいですね。

しかし、賜物と召しそのものがあなたを癒すものではありません。

ナタナエルは言いました。

「いつ私をご存じになったのですか、ラビ。どこで私を知ったのですか。」

イエスは言われました。

「ピリポがあなたを呼ぶ前、あなたがいちじくの木の下にいたとき、わたしはあなたを見た。」

するとナタナエルは答えました。

「あなたは神の子です。イスラエルの王です。」

彼の心は、主を受け入れる備えができていたのです。

11 井戸のそばの女のことも思い出してください。

イエスが彼女と語っておられたとき、こう言われました。

「行って、あなたの夫を呼んできなさい。」

彼女は答えました。

「私には夫がいません。」

するとイエスは言われました。

「あなたは正しいことを言った。あなたには五人の夫があつたが、今いっしょにいる者は夫ではない。」

彼女は言いました。

「あなたは預言者だとお見受けします。私たちは、メシアが来られることを知っています。」

そして彼女は町へ行き、人々にこう告げました。

「さあ、来てみてください。私がしてきたことをすべて言い当てた方がいます。この方こそキリストではないでしょうか。」

彼女の証しが、多くの人の心を動かしたのです。

12 さて、愛するクリスチャンの皆さん。

私たちは皆、永遠へ向かって歩んでいる者たちです。ここにいる一人ひとりが、いつの日か神の前に立ち、神と向き合うこととなります。そして、自分の人生で行ったことについて申し開きをするのです。

もし私が、「私はギャングで、ジョン・ディリンジャーの霊が私にある」と言ったとしたら、あなたは私が銃を持ち、そのような人物のように振る舞うことを期待するでしょう。なぜなら、その霊が私にあると言うからです。

もし私が、「私は偉大な芸術家の霊を持っている」と言ったなら、あなたは私が夕暮れに波がきらめく情景をとらえ、まるで命ある色彩のように描き出せることを期待するでしょう。芸術家の霊があるなら、芸術家の働きをするはずで

す。

それなら、もし私たちのうちにキリストの御霊があるなら、キリストのわざを行うはずではありませんか。

主はこう言われました。

「しばらくすると、世はもうわたしを見なくなる。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしはあなたがたと共におり、あなたがたのうちにあって、世の終わりまでいるからである。」

13 一つだけ、はっきりお伝えしておきたいのです。

人々は私を「熱狂者(ファナティック)」と呼ぶことがあります。もし自分のことだけを考えるなら、そう呼ばれるのは望みません。しかし、私が代表している福音のために言うのです。私は皆さんに、神の癒し手としてではなく、一人の兄弟として知っていただきたいのです。

「神の癒し手」という呼び名は、新聞や雑誌が付けたものです。

そのような者は存在しません。どんな人間も、あなたを癒すことはできません。

主イエス・キリストご自身でさえ、ご自分を神の癒し手とは主張されませんでした。

主はこう言われました。

「わたしがわざを行うのではない。わたしのうちに住んでおられる父が、そのわざを行うのである。」

そのとおりです。

あなたがどれほど善い人かではなく、信仰によって癒されるのです。

名の知られた立派なクリスチャンが来て、なぜ自分は癒されないのかを告げられるのを見たこともあります。

一方で、街から来た娼婦や、悪名高い人々、罪人たちが来て、足の不自由や盲目など、あらゆる病から癒されるのを見てきました。

癒されるために、クリスチャンである必要はありません。

しかし、癒されたままでいるためには、クリスチャンでなければなりません。

聖書は言っています。

「行って、もう罪を犯してはならない。さもないと、これよりも悪いことがあなたに起こる。」そうでしょう？

48 では、罪とは何でしょうか？

罪とは何ですか？

酒を飲むことでも、煙草を吸うことでも、賭け事でも、教会を拒むことでもありません。

罪とは不信仰です。

そのとおりでしょう？

「信じない者はすでにさばかれている」とあります。

わかりますか？

あなたが神から滅ぼされるのは、単に罪人だからではありません。

神から引き離されるのは、神と共に歩むことを拒み、神が備えられた道を歩もうとしないからです。

あなたの前には、いのちと死が置かれています。

アダムとエバと同じように、すべての人は自由意志を持つ存在です。

彼はナザレン派の人でした。

「その後、あなたの周りに多くのペンテコステ派の人々がいるのを見ました。誰かが、あなたはペンテコステ派になったと言いました。」

「それから今度は、あなたがバプテストだと言うのを聞きました。ですから、私はよく分からなくなったのです。」

私は言いました。

「それは簡単ですよ。」

「私はペンテコステ派であり、ナザレン派であり、バプテストなのです。」

それが私たちの在り方です。

私たちはただ、主イエス・キリストのあわれみを代表しているのです。

そのとおりです。

「一つの御霊によって、私たちは皆一つのからだにバプテスマを受け、一つの民となった」のです。

そしてそれが……

47 イエス様は、私がメソジストだったか、ルーテルだったか、バプテストだったか、ペンテコステ派だったかをお尋ねにはなりません。

主は、私の心がどうであったかによって私をさばかれるのです。

そのとおりです。

そしてそれが、私たちすべてをさばかれる基準です。

ですから、これは一つの教会だけのことだと思わないでください。

私たちはすべての教会を代表しているのです。

祈りの列に来る人々の中には、メソジスト、バプテスト、カトリック、その他あらゆる種類の人々がいます。

そして私はまだ一人も見ることがありません。信仰の土台に立って来た人で、癒されなかった人を。

それならば、あの愛する救い主でさえ癒しの功績を自分に帰されなかったのに、まして私たちが「自分が癒した」などと言えるでしょうか。

私たちはただ、病人のために祈るだけです。

癒されるのは、あなたの信仰によってです。

信仰によって、あなたは癒されます。

しかし、信仰を持つ前に……私は気づくのです。多くの人が、いわば「当てずっぽう」のような形で信仰に近づいています。失礼を承知で言えば、どこか推測や期待のようなものに近いのです。

祈りの列に来る人の九十パーセントは、**信仰ではなく「希望」**を持って来ています。

希望と信仰は違います。

信仰は確信です。

そこに、鍵があるのです。

14 さて、希望と信仰は別のものです。

希望は「そうならいいな」という思いです。

しかし信仰はそれとは違います。

信仰は確かな感覚です。

当てずっぽうでもなければ、想像でもありません。

それはあなたの体の感覚と同じように、実在するものです。

見ることは本当の感覚です。

聞くことも本当です。

味わうこと、触れること、嗅ぐこと——

この五つの感覚は体を支配する現実の機能です。それらが損なわれていなければ、確かにあなたにとって本物の感覚です。

そして信仰も、これら五つと同じくらい現実です。

いや、それ以上に現実です。

なぜなら信仰は、五感を越えて働くからです。

五感の上に立ち、五感の向こうへ進むのです。

そして、神の癒しの第一の、そして根本的な理由はただ一つ――

神が聖書の中でそう言われたからです。

それが唯一の確かな土台です。

神の御言葉こそが、揺るがない基礎なのです。

15 今夜お話ししているあいだに、今回の集会は少し新しい形で始めたいと思っています。いつものようにすぐ祈りの列に入って、三日も四日も経ってから人々が何が起きているのか理解する、というやり方ではなく――

まず土台である神の御言葉の上に、皆さんの信仰をしっかりと築きたいのです。

そうするなら、このミネアポリスでのリバイバルは、これまで以上の実りを結ぶと信じています。

私はヨーロッパでそれを試しましたが、素晴らしい結果となりました。

最後の夜、通訳を通して語っている最中に、何百人もの人々が聖霊のバプテスマを受けたのです。若い人たちが一度に何百人も――正確な数は忘れましたが――ただ御言葉を聞いているうちに受けたのです。

「信仰は聞くことから始まる。聞くことは神の御言葉による。」

神の御言葉は、どんな状況でも、どこにおいても、いつでも、サタンに勝利します。

御言葉は決して敗北しません。

16 イエスが神の御子であったことは、私たち皆が信じていますね。

そのとおりです。私たちは主を神の御子として受け入れています。

ここにいらっしゃる方々の中には、緊急のケースの方もいるでしょう。とても重い病で、明日や別の日に戻って来られない方もいるかもしれません。

しかし、もしあなた方が心を一つに結び合わせ、家で祈禱会を始めるなら――

メソジストの方も、バプテストの方も、ルーテルの方も、どの教派の方でも、みな一つになりましょう。

今、私たちはどの教派も代表していません。

私たちはイエス・キリストを代表しているのです。(分かりますね?)どの教派でもありません。

率直に言いますが、私は今、どの教派にも属していません。

何にも属していません。

私はバプテスト教会で按手を受けました。

しかし、彼らの望みによって、私はもはやバプテストではなくなりました。

私は……

46 少し前のことですが……アーカンソー州リトルロックにいました。

そこに、ほとんど一生涯にわたってひどく足が不自由だった男性がいました。松葉杖で歩いていました。

彼は祈りのカードを受け取り、番号を呼ばれて壇上に上がり、そこで癒されました。

数日後、町の通りで私に会いました。

彼は松葉杖を手に持ち、通りを行ったり来たりしながら叫び、喜びに満ちていました。

彼は言いました。

「ブラナム兄弟。」

「ご存じですか、あなたが最初に説教を始めたころ、私はあなたはナザレン派だと思っていました。」

栄光の家へと連れて行く、そのためのために。

44 さて、皆さん、今夜のことですが——

あまり長くはしません。

今夜は何人かの病人のために祈りたいと思います。そして私たち自身の心を落ち着かせたいのです。

しかし数日のあいだは、私が祈りの中にいる間、互いに少しずつ知り合う時間にしたいと思っています。

今、私に約束してくれますか。

このようにいきなり集会の中で呼び出されるのは、私にとっては少し衝撃なのです。

神がそれを与えてくださるように、一緒に祈ってくれますか。

私は、主が来てくださらない限り、何一つできません。

わかりますね？主が来られるまでは、私はこの世のどんな人間と同じように無力です。

今夜の祈りの最中に、主が来てくださるかもしれません。

そうなることを願っています。

しかし、それはいつもそんなに早くはありません。

たいてい私は二日か三日、断食して祈ります。そして何かが自分から離れていくのを感じ始めます。それから主の御臨在が近づいてきます。

やがてそれが私の上に臨むのです。

そのとき、すべてが変わります。

奉仕のとき、私はあまり話しません。ただ入って来て、祈りの列が始まり、病人のために祈るのです。

ですから、どうか私と共に祈ってください。

45 さて、今夜祈っている間に——

そして主は、単なる人ではありませんでした。

神がキリストのうちにおられ、世をご自分と和解させておられたのです。

主は神人でした。神が主を通して働いておられました。

しかし——

主がサタンと対峙されたとき、主はご自分の偉大な力を用いられませんでした。

天のあらゆる力が主のうちに宿っていたと私は信じていますが、それでも主はそれらを使って敵を打ち負かされたのではありません。

サタンが主を誘惑したとき、主はこう言われました。

「人はパンだけで生きるのではない、と書いてある。」

神殿の頂に立たされたときも、

山の上に連れて行かれたときも、

主は常に——神の御言葉によって——敵に対抗されました。

これが私たちへの模範です。

神の御言葉は、どこでも、いつでも、どんな状況でも、敵に勝利します。

なぜなら——

「書いてある」からです。

17 ですから、祈りの列に入るときは、まず自分が何をしているのか、そしてどのように神を受け入れるのかを理解してから来てください。

少し前のことですが、世界でも最高峰と言われるメイヨークリニックで、私は「もう望みはない」と診断されました。

「生涯もう役に立つことはできない」と言われたのです。

あのとき、私は完全に打ちのめされ、希望のない状態でした。世界最高と言われる医療機関で、そう宣告されたのですから。

しかし——主が私に会って下さいました。

私は信仰によって主を信じました。

そして今夜、私は人生で最も体重があり、最も健康な状態にあります。

なぜでしょうか？

「信仰は聞くことから始まり、聞くことは御言葉による」のです。

イエスはルカによる福音書でこう言われました。

「何でもあなたがたが祈り求めることは、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

ここに答えがあります。

18 御言葉の順序をよく見てください。

まず、受けたと信じること。

それから、それが現れるのです。

先に「持った」と信じる。

そのあとで「持つ」のです。

祈りに来るときは、告白し、神を信じ、神がなさると信じることです。

そして神は、ご自分の御言葉に対して責任を持っておられます。

神の価値は、神の御言葉の価値と同じです。

人もまた、自分の言葉以上の価値はありません。

そして神は誤ることがありません。

神は偽ることができません。

御言葉は真実です。

だから私たちは、御言葉のとおり神を受け入れ、信じるのです。

そうすれば——

その人々は「ホーリーローラー」と呼ばれ、狂信者と呼ばれ、神の癒しを説く者だと言われ、

路地裏に追いやられ、あらゆる名前と呼ばれてきました。

しかし、どんな偉大な絵画も、栄誉の殿堂に飾られる前には、批評家の間を通らなければなりません。

私は、その小さな教会はすでに批評家の間を通ってきたと信じています。

そして間もなく、天から叫び声が響き、

神はそれを栄誉の殿堂に掛けられるでしょう。

それを携挙によって取り上げ、栄光の中へと引き上げるために。

私たちが今日見ているしるしと不思議は、その信仰を奮い立たせるためです。

主が来られるとき、私たちは携挙され、先に行った人々と共に空中で主と出会うために引き上げられる——そのことを信じるために。

43 さて、私はこうも信じています。

多くの人が倒れ、後退し、神から離れてしまったと。

私は「背教(バック・スライド)」という言葉を使いましたね。

バプテストにとっては少し耳の痛い言葉かもしれませんが。しかし私は、人は確かに後退し得ると信じています。それは真実です。私はそう知っています。

そして私は、この御霊が、かつては旅人のように主と共に歩んでいた人々を呼び戻していると信じています。

神から離れてしまった人々を、再び呼び戻しているのです。

主の大いなる恐るべき日が来る直前に、教会を再び一つに集めているのです。

神がイエスを二度目に地上へ送られ、

カルバリの十字架の死によって贖われた者たちを集め、

もしそれを狂信と呼びたいなら、どうぞ私を狂信者と呼んでください。

私は、イエスが文字通り、肉体をもって再び来られると信じています。

そしてその時は近い、今まさに近いと信じています。

私たちには働く時間が、ほんのわずかしかなかったと信じています。

41 そして私は、今日この地を席卷している世界的なリバイバルは、一つのしるしであると信じています。

それは、ノアの時代にあったメッセージと同じようなものです。

当時、人々は罪の中で騒ぎ立てていました。

ノアは「狂信的だ」と思われる福音を語りました。しかし彼は、人々を安全の箱舟へと招いたのです。

同じように、神の御子の栄光ある福音が、聖霊によって現わされ、今日の国々を巡っています。

そして人々を、キリスト・イエスという箱舟の中へと導いているのです。

やがて来るあらゆるさばきから安全に守られるために。

地にさばきが下り、原子の力が国々を揺るがすとき、

私たちは波の上を越えて栄光の中へと上って行くでしょう。私はそれを信じています。

そして私は、長い間「狂信者」と呼ばれてきた小さな教会があると信じています。

42 もちろん、狂信的な人たちがいることは分かっています。確かにいます。たくさんいます。

しかし、ある小さな教会があります。

特定の教派でも、特定の名前でもなく、ただ神を愛し、神が今日も聖霊によって私たちのただ中に生きておられるという、あの超自然を信じて立ち続けてきた人々です。

それは必ず起こります。

19 私は、最高の医師たちが見放した癌の患者を見てきました。

生まれつきの盲人、痙攣に苦しむ子どもたち、体がさまざまにねじれてしまった人々もいました。

しかし、この壇上で——主が解放されなかったことを、私は一度も見たことがありません。

それは真実です。

なぜでしょうか？

主は神だからです。

そして、神が御言葉のとおりを受け取られるとき、

すべてのことは可能なのです。

私たちが信じ、確信に基づいて行動するなら、それは必ず起こります。

20 まず第一に、それが神のみこころであると確信しなければなりません。

神が癒すことは、みこころなのか——その点を、集会の中でしっかり扱う必要があります。おそらく責任者の方々も、その点について語られるでしょう。

イエスが癒しのために死なれたこと。

そして最初に与えられた使命が「癒し」であったこと。

弟子たちを遣わされたとき、主が最初に言われたのはこうでした。

「病人をいやし、らい病人を清め、死人をよみがえらせよ。あなたがたはただで受けたのだから、ただで与えよ。」

これが最初の使命です(マタイ10章)。

そして最後の使命——マルコ16章ではこう言われました。

「全世界に出て行って、福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。そして信じる者には、これらのしるしが伴う。」

なぜでしょうか？

全世界だからです。

「わたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、蛇をつかみ、毒を飲んででも害を受けない。また、病人に手を置けば回復する。」

問題は何でしょうか？

私たちクリスチャンは、いざ決定的な場面になると弱くなりすぎるのです。

本物なら、本物です。

違うなら、違います。

もし私が心からそれを信じ、本物だと確信していなければ、今夜ここに立ってはいません。

しかし私は信じています。

それだけではありません。それが本物であることを知っているのです。

私はそれを何千という場所で見してきました。

21 あの夜、主が私に会われて、この務めを告げられたときのことです。

私はただの小学校程度の教育しか受けていない者でした。どうして世界の人々の前に立ち、この賜物を携えて行けるのでしょうか、と私は思いました。

主は言われました。

「わたしがあなたと共にいる。」

私は言いました。

「人々は私を信じないでしょう。」

主は言われました。

「あなたに二つのしるしが与えられる。」

ここを覚えておいてください。

しるしが癒すわけではありません。

彼女は建物の中を歩き回りながら、神をほめたたえました。

車椅子は脇へ押しやられました。

神の栄光が建物いっばいに広がり、人々は次々に立ち上がり、松葉杖や杖を放り投げて歩き始めました。

それは何でしょうか？

あなたの問題を言い当てること自体が人を癒すものではありません。

しかし、それがすることはこれです、皆さん。

私たちのただ中で、超自然の神が働いておられるという事実を、人々に実感させるのです。

まさにその通りなのです。

40 そして私が信じていることは……

今、私は……神であることは分かっています。

しかし私が思うに、皆さん、これは使徒時代の再現なのです。

どうか、これを狂信だとか、催眠術だとか、心霊術だとか、そういったものに分類しようとしないうでください。

多くの人がそう名付けたがります。

しかし、聖パウロもかつて説教しているときに、

「あなたには癒される信仰があると分かる。立ちなさい。イエス・キリストが……」

と言ったではありませんか。

もちろん、サタンは何かしらの名前を貼りつけようとするでしょう。それは分かっています。

しかし私は、イエス・キリストの再臨が近づいていると信じています。

心からそう信じています。

「神様、ありがとうございます。神様、ありがとうございます。」

と言っていました。

私はその姿を、幻が消えるまで見続けました。

そして振り返り、言いました。

「姉妹よ……」

ああ……皆さん、あなた方には分からないでしょう。

自分がどこに立っているかを“知っている”ときの感覚を。

そのときには、もう何も——

地獄中の悪霊が総出で来たとしても、それを止めることはできません。決して。

私は、医者が病床の前に立って言うのを見たことがあります。

「彼は中に入れない。あんな狂信は困る。ここには入れられない。」

私は言いました。

「少しだけ脇へどいて、その患者を数分間見てもらえますか？」

ああ……数分のうちに、まったく正常になるのを見るのです。

それは一度も失敗したことがありません。

神が私の証人です。

39 私はその少女を見て言いました。

「姉妹よ、神の御子イエス・キリストがあなたの祈りを聞かれ、あなたを癒されました。立ちなさい。」

その少女は八歳のときから歩いていなかったのです。

しかし彼女は車椅子から立ち上がり、そこに立ちました。

ブラザー・リッチー、あなたはそこに立っていましたね。

しるしは信仰を起こすためのものです。

癒されるのは、ただ信仰によってです。

お分かりですね？ しるしは信仰を働かせるだけなのです。

モーセがイスラエルの子らに「神があなたがたを解放するために私を遣わされた」と告げたとき、彼は二つのしるしを行いました。

手を懐に入れて取り出すとらい病になり、もう一度入れて出すと元に戻った。

杖を投げると蛇になり、取り上げると再び杖になった。

そしてイスラエルはモーセを信じました。

同じように、与えられたこれらのしるし——人々の心の思いや、してきたことを示す働き——それは人によるものではありません。

神の御霊が下り、示しておられるのです。

集会の中で、しばしば大きな光が巡るように現れます。

それは御霊が働いておられるしるしなのです。

22 少し前のことですが、ヒューストンで、その光が写真に撮られました。写真家が写したのです。

その写真をご覧になったことのある方はどれくらいおられますか？——ああ、多くの方ですね。

あれこそが、癒しをなさる御方です。

私ではありません。私はただの通路にすぎません。

ベテスダの池のようなものです。癒したのは水そのものではなく、水に下りて来た御使いでした。同じように、癒すのは人ではありません。人の上に臨む神の御霊が癒すのです。お分かりでしょうか。

私はここにいる誰一人として知りません。

会衆の中に、私が個人的に知っている方は見当たりません。

そして神がご存じのとおり、皆さんに何が起きているのか、私は一人として知りません。

しかし、油注ぎの下にあっては、この壇上に来る人で、何が問題なのか、どのような人生を歩んできたのか、場合によっては病の原因まで——示されない人はいません。

23 それは何のためかと言えば、患者の信仰を築くためです。

ヨーロッパでもそうでしたが、できるだけそれを長く抑えようと努めています。なぜなら……それは私を非常に弱くするからです。立っていられなくなるほどです。ご存じの方も多いでしょうが、時には壇上から担ぎ下ろされることもあります。本当に命が抜けるような感じになるのです。

今夜ここにいる間に、祈りに入る前にそれを説明しておきたいと思いました。皆さんに理解していただきたいからです。

私に何か悪いところがあるわけではありません。痛みがあるわけでもありませんし、しばらくすれば元に戻ります。ただ、その働きが始まると、力が引き出されるのです。

それが始まると、顔つきも変わります。周囲のことが分からなくなります。誰がそばにいるのかも分からない状態になります。

患者が壇上に来るとき——そこから、主が働かれるのです。

24 今ここで、「私は信仰があります」と言われれば、私はあなたを信じます。あなたがクリスチャンであり、本気でそう言っていると受け取ります。

しかし——

時に人は、「信仰がある」と思っているだけで、本当はそうでないことがあります。

それでも私は、あなたの言葉を信じます。

けれども、油注ぎの下に入ると違います。

そのときは、その人に本当に信仰があるかが分かります。

信仰がないときは、こんな感じです。

「あなたはその人と別れました。」

「その通りです。」

「それからある宗教団体に入り、そこで別の男性と結婚させられました。」

「その通りです。」

「あなたはその人も愛していなかった。そして離れました。」

「その通りです。」

「今は別の男性と結婚しています。」

「そのとおりです。」

そして私は言いました。

「あなたはかつてクリスチャンでした。しかし神から離れ、墮落してしまいました。」

「その通りです。」

彼女は倒れそうによろめきました。

そのとき、彼女は叫び声を上げました。そして神は彼女を赦されたのです。

その瞬間、彼女の聴力は戻りました。

そして彼女はその場で聖霊のバプテスマを受け、壇上に立ったまま、突然そのようになったのです。

38 私は振り向きませんでした。

すると、あの車椅子に座っていた足の不自由な女性が、今ここに座っているこの紳士を見るのと同じくらいはっきりと、椅子から立ち上がるのが見えました。

ただし、そのとき彼女は、実際に座っていたときとは違う服装をしていました。

そして通路を歩いて行くのが見えました。手をこう振りながら、

そして彼女をじっと見ました。

彼女は身長五フィート二、三インチほどだったでしょうか。

すると、その女性が舞台の向こう側へ歩いていくのが見えました。

そのようにして、舞台を横切って行ったのです。

そして十四歳くらいの少女がそこに立っているのが見えました。

長い三つ編みを背中に垂らし、小さなチェック柄のリボンをつけていました。

私は言いました。

「あなたは十四歳くらいのとき、長い三つ編みをしていましたね？」

彼女は言いました。

「はい、そうです。」

37 そして私は、その少女が間違った道へ入っていくのを見ました。

そこからすべてが始まったのです。

私は、見たままを語り始めました。

「あなたは十四歳のとき、間違った道を選びました。そして結婚する前に、ある男性との間に子どもができました。」

皆さん、覚えておいてください。もし公に知られたくない罪があるなら、ここに来る前に告白しておきなさい。

ここでは、すべてがそのまま明らかにされるのです。

その若い女性は泣き始めました。

「その通りです」と言いました。

私は言いました。

「あなたは愛していない男性と結婚しました。」

「その通りです。」

あなたはここに立っているのに、患者は下のほうにいる。

「信仰があります」と言っているけれど、本当はここまで上がってきいていない。

しかし、その患者の信仰がここまで上がってくると――

神を証人として言いますが、その壇上で解放されなかったことを、私は一度も見たことはありません。

何の病であつてもです。

新聞記者たちが壇上に駆け上がり、小さく細かった足が普通の大きさに戻るのを見て叫び声を上げるのを見ました。

ねじれて引きつっていた子どもたちが、普通に立ち上がり、歩いて壇上を降りていくのを見ました。

人々はその光景に気を失いそうになりました。

足の不自由な人が歩き、

さらには道端に横たわっていた死者が起き上がるのを見ました。

それは人のわざではありません。

信仰がそこに触れたとき、神が働かれるのです。

25 今のことは、私が何かをしたわけではありません。

もし今夜、イエス様がこの天幕の中に歩いて入って来られ、私たち全員をさばきの前に呼ばれるなら、ここにいる最も弱い聖徒のほうが、私よりも大きな報いを受けるでしょう。

これは心の底から言っているのです。

謙遜ぶって言っているのではありません。本心からです。

なぜなら私は……あなた方の多くが長い間通ってこられたような苦しみを、同じようには経験していないからです。

私の奉仕が始まったころ、私はバプテスト教会で育ちました。

そしてこの賜物が与えられたとき、人々は私が気が狂ったのではないかと  
思ったのです。

「何か変な物でも食べたのか？悪夢でも見たのか？」と聞かれました。

私はそれを快く思いませんでしたし、彼らも信じませんでした。

そして言いました。

「君は小学校程度の学歴しかないのに、世界中の人々に説教するだ  
て？」

「さっさと家に帰ったほうがいい」と、そのように言われたのです。

26 バプテストの人たちは私を望みませんでした。

けれどもフルゴスペルの人々は言いました。「私たちはこの賜物が私たち  
の教会に来るよう祈ってきたのです」と。そして彼らは私を受け入れてくれまし  
た。

それまでは、私はいつも“黒い羊”のような存在でした。

けれどもついに、自分が属する場所を見つけたのです。

私の人生はずっと、自分がどの階層に属しているのか分からないような感  
じでした。

少年のころ、私は煙草も酒もやりませんでした。だから若者たちは私とあまり  
関わろうとしませんでした。

女の子たちと付き合う年ごろになっても、彼女たちはダンスに行きましたが、  
私はダンスには行きませんでした。

だから私は、壁際に立っているだけの存在でした。

救われたとき、私は昔ながらの、心からの信仰を信じていました。

しかし教会はそうではありませんでした。彼らは私を狂信者だと思ったの  
です。

まあ……「類は友を呼ぶ」と言いますね。

ついに私は正しい場所にたどり着いたのだと思います。

イエス・キリストの偉大さと善良さをほめたたえてください。

それから、その若い女性のために再び祈ろうとしましたが、それは彼女から  
離れませんでした。

それは、私の手で触れて確かめたことでした。

35 患者が右手をそこに置きます。そして……

それは何かの識別です。キリスト者の皆さん、私は本当に分からないので  
す。説明することはできません。ただ、それが何であるかは分かります。

私の手を見れば分かります。

手が大きく腫れ上がり、小さな白い斑点のようなものが手の上を走るの  
です。

それは胸のあたりまでしびれのように来て、手がほとんど動かせなくなる  
ほどです。

それはその人の体内にある病原、病の霊の影響なのです。そして、それは  
決して外れません。

私はそれが来たときには分かります。

そしてそれが去ったときも分かります。

しかし、私がそれを去らせることはできません。

それを去らせるのは、あなたの神への信仰です。

私は自分で去らせることはできません。

あなたの信仰なのです。

36 それから私はその若い女性を見て、

「おかしいですね」と言いました。

もう一度イエス様に彼女を癒してくださるよう願いましたが、それは依然と  
して離れませんでした。

私は言いました。「何かおかしい。これは去りません。」

私は言いました。

「やはり耳の霊だと分かりました。ただ、どれほどかは分からなかったのです。」

彼女は言いました。

「はい、何年も前から片耳が聞こえません。」

私は言いました。

「もし私がイエス様にお願ひすれば、イエス様があなたを癒してくださいと信じますか？」

彼女は言いました。

「心から信じます。」とても敬虔そうな若い女性でした。二十代くらいだったと思います。

私は頭を垂れて彼女のために祈りました。

そして顔を上げて再び彼女の手を握ると、その振動は止まっていませんでした。

何が起きているのか分からず、少し動揺しました。

それは、まるで何かがこちらを引っ張っているような感覚なのです。

油注ぎの中にいると、それがはっきり分かります。

全身で感じるのです。何かがこうして引いているように感じるのです。

34 今夜は、こうして心を開いてお話ししています。

私は疲れており、旅の途上にあります。そして皆さんに、集会の背景を少しでも分かっていたら良かったのです。

もしこれらのことが真実でないなら——

この集会を通してでも構いません、どうぞ言ってください。「ブラナム兄弟は偽預言者だ」と。

しかし、もしそれが真実であるなら、

そして私は本当に感謝しています。

私たちは栄光の中で共にいることになるかと信じている、その仲間たちと共にいられることを、とても幸せに思っています。

27 さて、この識別の働きに入りますと、人が前に来ます。

私はその人について何も知りません。しかしそれ(聖霊)が語り始めるのです。

もしその人が正しい信仰を持って来るなら、もう何もする必要はありません。

その時点で、すでにそこにあるのです。

さて、ひとつの集会を例に取りましょう。

ある夜のことでありますが……集会の様子を説明するために……ボーモントでの集会を取り上げましょう。

ブラザー・リッチー、あなたはボーモントとヒューストンにいましたね？

よろしい。

では、ボーモント集会の最後の夜を取り上げます。

今私たちが置かれている集会がどんなものか、だいたい分かるでしょう。

ちなみに、それは私たちが海外へ行く直前のことでした……

28 私たちは入場しました。

すでに何夜も続けて集会が行われていました。ヒューストンにいたのです。リッチー兄弟はそこにいましたね。皆さんも彼をご存じでしょう。

ヒューストンでは栄光に満ちた集会がありました。

しかし、これ以上会場が取れなかったため、最後はボーモントで締めくくることになりました。

何かの催し——スタンピードか何か——がコロシウムを使うことになり、ヒューストンではもう場所がなかったのです。

そこでヒューストンからボーモントまで、何両もの客車を連ねた列車が手配され、人々が大勢運ばれてきました。

集会に入ると、いつものように祈りの列ができていました。

私たちは毎日、一定枚数の祈りのカードを配ります。

難しいのは、数人のケースを扱っただけで、いのちが私から抜けてしまうことです。

そうなると、彼らは私を列から連れ出さなければなりません。そして兄弟たちやマネージャーたちが、そのあとのことを取り仕切ります。

カードを配り、その中から一定数を選び、壇上に呼び上げます。

二、三人がすでに壇上に来ていました。

もちろん、必ずしもカードが必要というわけではありません。祈ってもらうために壇上に来ていたのです。

そのとき、ふと見ると、救急担架がこのように運ばれてきました。

その男性は毛布で覆われており、私は顔だけを見ることができました。

29 さて、それはすべて幻によって見せられるのです。

すべてが幻によるのです。

あなたが人生でしてきたことを見るとき、私はただ……それを“見る”のです。

しかしそれは、今こうしてあなたを見ているのと同じような感じですよ。

そしてそれは、私が小さな少年のころから、ある程度ずっとそのようでした。

だから私は、「賜物と召しは取り消されることがない」(悔い改めによらない)と信じています。

人は賜物を持ってこの世に生まれてくるのです。

音楽家になるには、生まれつきでなければならぬと私は信じています。

「姉妹よ、私が見たのはそれだけです。今はもう私から去っています。私は、神が語られること以外は何も言えません。」

「真の預言者は、まず神が与えられない限り、決して語ることはできません。もし自分から語れば、それは失敗となり、正しくありません。ただ恥をもたらすだけです。」

「ですから、神が語れと言われることだけを語るのです。たとえそれが私自身の母であったとしても、神が語れと言われたことしか言えません。」

33 そしてもう一度その婦人の方を見てから、別の女性のために祈ろうとしました。

するとちょうどそのとき、一人の若い女性が前に出てきました。とてもきちんとした感じの方で、黒い髪が肩の下まで伸びていました。

私は言いました。

「こんばんは。」

彼女も言いました。

「こんばんは。」

私は彼女の手を取りました。すると、何か妙な感じがしました。

耳の不自由さから来る振動のようなものが伝わってきたのです。

私は言いました。

「私の声が聞こえますか？」

彼女は言いました。

「はい、聞こえます。」

私は言いました。

「いや、あなたは……それは……耳の……」

彼女は言いました。

「片耳が聞こえないのです。」

抱いていました。青い毛布に、まわりには白いフリンジがついていました。

私は、こちらへ向かって来る患者さんを見ようとして振り向きました。

そしてもう一度後ろを見て、その幻がまだそこにあるか確かめました。

見ると、やはりその女性が赤ん坊を抱いていました。

しかしその幻は消えてしまいました。

車椅子の女性は、こうして手を組み、泣いていました。

私は言いました。

「あなたは、生まれつき瘻直でしたね？」

彼女は言いました。

「はい、そうです。」

私は言いました。

「あなたのお母さんが、白いフリンジのついた青い毛布にあなたを包んで抱いている幻を見ました。」

そして周りを見回して、

「ここにあなたのお母さんが座っています。約二十五年前のことですが、私は今でもその顔立ちを見ている。これはあなたの娘さんですね？」

母親は言いました。

「はい、そうです。」

私は言いました。

「そばに立ってください。そうです、そのとおりです。」

彼女は言いました。

「私は何をすればよいのですか？私は癒されたのですか？」

私は言いました。

ある子どもにどれほど音楽教育を施しても、決して音楽家にならないことがあります。

しかし、ABCも満足に読めない、言えないような子が、どんな種類の音楽でも弾けることがあります。

それは生まれつきなのです。

どうすることもできません。

30 ですから、それは私の義によるのでも、私の家族の善さによるのでもありません。

神の恵みが、この賜物を人々のところへもたらしたのです。分かりますね？

ただ神が、その目的のためにそれを選ばれただけなのです。

そして時が進むにつれて、それは次第に、ますます大きくなっていきます。どんどん強められていくのです。

その夜も、すでに二、三人が壇上で祈られ、癒されていました。

私は外を見ました。そしてその男性を見たのです。

彼は毛布で覆われていました。顔は赤く見えました。

そしてその人の上に、こういう講壇が見え、ひとりの男性が説教しているのが見えました。

もう一度見下ろすと、それは同じ男性でした。

私は言いました。

「あなたは牧師ですね。」

彼は言いました。

「はい、そうです。」

すると、私の前に何かが展開し始めました。

私は彼を見て言いました。

「そうです、あなたは牧師です。そして四年前、神はあなたにあることをするよう告げられました。しかしあなたはそれをしませんでした。あなたは従わなかったのです。」

「それ以来、あなたの人生は問題続きでした。そしてあなたは今、脚に骨移植を受けて、病院から出てきたばかりです。」

すると彼は叫び声をあげ、泣き始めました。

そしてその場で、神は彼を癒されたのです。

31 そして、振り向いて次の患者さんを見ようとしたとき、若い女性が壇上に運ばれて来ました。

ふと見ると、ここに担架に横たわっている一人の男性がいました。

その少し上、空中のただ中に、ひとりの男が働いているのが見えました。リガー(索具作業員)でした。わかりますね?多くの方はご存じでしょう。

彼は何かを吊り上げるために、ダブル・シープシャンクの結び目を作っていました。

私は見続けました。そして、どこなのかを確かめようとする——そこに同じ男性が担架に横たわっていました。

もう一度見ると、再びその光景が現れました。

私はその男が落ちるのを見ました。

そこで私は言いました。

「あなたはリガーですね?」

彼は言いました。

「はい、そうです。」そして話し始めました。

私は言いました。

「今からしばらく前に(どれくらい前だったか今は忘れましたが)、あなたは落ちました。病院に運ばれましたね。そして、背の高い黒髪で眼鏡をかけた医師があなたの担当でした。」

彼は言いました。

「その通りです。」

私は言いました。

「あなたの奥さんは金髪の女性です。小さな子どもが二人いますね。」

「まったくその通りです。」

私は言いました。

「あなたは三年、いや四年、五年ほど、腰から下が麻痺していますね。」

彼は言いました。

「その通りです。」そして続けて言いました。

「どうしてそれをご存じなのですか。私は何をすればよいのですか?」

私は言いました。

「私にはわかりません。」

そして振り向こうとしました。

しかし、もう一度見ると、その男性が、同じ背丈で、茶色のスーツを着て、人々の頭の上を歩くようにして建物の中を進みながら、

「主をほめたたえよ。主をほめたたえよ。」

と叫んでいるのが見えました。

そこで私は言いました。

「あなたはイエス・キリストによって癒されました。立ちなさい。」

腰から下が麻痺していたその男性は、立ち上がりました。そして建物の中を進みながら、主をほめたたえ続けたのです。

32 そしてこちらに向き直ったとき、車椅子に座っている一人の女性が見えました。

そのそばに女性が立っていて、腕には小さな瘻直(けいちよく)の赤ん坊を